早稲田大学大学院教育学研究科紀要　第三十三号　二〇二三年三月

中島敦「悟浄歎異」ノート

堀　誠

＊

「――沙門悟浄の手記――」と副題される「悟浄歎異」は、昭和十七年（一九四二）十一月十五日に今日の問題社から刊行された『南島譚』に「悟浄出世」とともに収載され、両篇の末尾には「――「わが西遊記」の中――」と記される。「悟浄出世」が「寒蝉敗柳に鳴き……」のエピグラフに始まるのに対して、本篇（一行空けによる十二段の構成）は、

昼餉の後、師父が道傍の松の樹の下で暫く憩うてをられる間、悟空は八戒を近くの原つぱに連出して、変身の術の練習をさせてゐた。

と第一段が始まり、悟空が八戒に変身の術を練習させる模様が描かれる。

「やつてみろ！」と悟空が言ふ。「龍に成り度いと本当に思ふんだ。いいか。本当にだぜ。此の上無しの、突きつめた気持で、さう思ふんだ。ほかの雑念はみんな棄ててだよ。いいか。本気にだぜ。此の上なしの・とことんの・本気にだぜ。」

「よし！」と八戒は眼を閉ぢ、印を結んだ。八戒の姿が消え、五尺ばかりの青大将が現れた。傍で見てゐた俺は思はず吹出して了つた。

「莫迦！　青大将にしか成れないのか！」と悟空が叱つた。青大将が消えて八戒が現れた。「駄目だよ、俺は。全くどうしてかな？」と八戒は面目無げに鼻を鳴らした。

本気で龍に変身しようと印を結んだものの、青大将にしかなれない八戒の技量を目撃して思わず吹き出した「俺」こそ、この手記の主である「沙門悟浄」に他ならない。彼は通例「沙悟浄」と呼ばれ、日本では「河童の沙悟浄」と呼称されて久しいが、その沙悟浄の呼称は、『西遊記』第八回のテキストに、南海観世音菩薩が流沙河で会った怪物に西天取経の人の弟子となれと引導を渡して摩頂受戒を執り行うとともに、「沙を指して姓と為す（指沙為姓）」のように、ゆかりの流沙

河の「沙」によって沙悟浄と命名したとの由来が記される。それを中島が「沙門、悟浄」と記すのはなぜかと年来不思議に思ってきた。

作家の自家薬籠を探ろうとするとき、その蔵書目録やノートの類は重要な基礎資料となる。中島の場合、蔵書（神奈川近代文学館蔵「中島敦文庫」）に「続国民文庫」第十三巻『水滸伝　三　附西遊記』があり、その『西遊記』が江戸時代のダイジェスト翻訳本『画本西遊伝』、一名『絵本西遊記』のテキストであることが明らかである。「悟浄出世」「悟浄歎異」の創作に用いた『西遊記』のテキストは、この「続国民文庫」本に依拠するものと考えられる。(1) その初編巻之三の「我佛造経伝極楽　観音奉旨上長安」の翻訳には、「則ち法名を沙悟浄と賜り、」とあるのみで、先の『西遊記』第八回原本の「沙を指して姓と為す」といった「沙」字の由来に関わる記載は一切ない。したがって、中島はこの『西遊記』（「続国民文庫」本）のテキストの「沙」字に対して自ら「沙門」の解釈を施し、「沙門悟浄」と記したものに違いない。中島の創作の筆端をうかがうに足るが、こうした登場人物の表記では、玄奘を「三蔵法師」あるいは「師父」と表記するのに対して、この沙門悟浄の兄弟子の二人をおよそ悟空と八戒と呼称しているのは「悟浄出世」の場合と同様である。

面目無げな八戒に対して、兄弟子たる悟空はなおも手厳しい言葉を投げつける。

「駄目々々。てんで気持が凝らないんぢやないか、お前は。もう一度やつて見ろ。いいか。真剣に、かけ値無しの真剣になつて、龍に成り度い龍に成り度いと思ふんだ。龍に成り度いといふ気持だけになつて、お前といふものが消えて了へばいいんだ。」

よし、もう一度と八戒は印を結ぶ。今度は前と違つて奇怪なものが現れた。錦蛇には違ひないが、小さな前肢が生えてゐて、大蜥蜴のやうでもある。併し、腹部は八戒自身に似てブヨ〳〵膨れてをり、短い前肢で二三歩匍ふと、何とも言へない無恰好さであつた。俺は又ゲラ〳〵笑へて来た。

「もういい。もういい。止めろ！」と悟空が怒鳴る。頭を掻き〳〵八戒が現れる。

真剣さを強説されて再度チャレンジしたものの、結果は小さな前肢が生えた錦蛇の体で、大きさは青大将に勝るが、大蜥蜴よろしく腹部も膨れた不恰好な様というから、大きな進歩はなく、技量は「画龍点睛を欠く」以前のレベルである。問答は、駄目を押すがごとく台詞書きの体でなおも展開する。

悟空。お前の龍に成り度いといふ気持が、まだまだ突き詰めてゐないからだ。だから駄目なんだ。

八戒。そんなことはない。これ程一生懸命に、龍に成り度い龍に成り度いと思ひ詰めてゐるんだぜ。こんなに強く、こんなにひたむきに。

悟空。お前にそれが出来ないという事が、つまり、お前の気持の統一がまだ成つてゐないといふことになるんだ。

八戒。そりやひどいよ。それは結果論ぢやないか。

悟空。成程ね。結果からだけ見て原因を批判することは、決して最上のやり方ぢやないさ。しかし、此の世では、どうやらそれが一番実際的に確かな方法のやうだぜ。今のお前の場合なんか、明らかにさうだからな。

八戒の変身の技に対する精神論的、結果論的な批判が見えるが、この一段を承けて、話題は「悟空によれば、変化の法とは」と展開していく。じつは、ここに至る悟空と八戒の変化術の特訓の模様は、『西遊記』自体には無い話題であり、もちろん中島が依拠した「続国民文庫」本の『絵本西遊記』のテキストにも備わるものではない。まさに中島のオリジナルの一齣に他ならないのである。この変身術をめぐる悟浄の目撃談を考えるとき、一つの視点を与えてくれるのが中島の「研究ノート第四」に書き留められたメモである。

＊＊

「研究ノート第四」には次のような六行にわたるメモを認める。(2)

七十二般、地煞変化法、筋斗雲、如意金箍棒、

〈鉛筆薄く判読不能の一行あり〉

羅刹女、――翠雲山芭蕉洞

玉面公主、積雷山魔雲洞

唵嘛呢叺(ママ)哞哞、

火焔山――祭賽国

一行目の「七十二般、地煞変化法」は悟空が須菩提祖師から伝授された変身の術、「筋斗雲」は十万八千里を一っ飛びする悟空の乗り物、「如意金箍棒」は伸縮自在の特殊金属による武器であることが明らかである。三行目の「羅刹女、――翠雲山芭蕉洞」、三行目の「玉面公主、積雷山魔雲洞」は、六行目の「火焔山」に関わるもので、悟空と闘う牛魔王の妻と愛人とに関する記述である。五行目の「唵嘛呢叺(ママ)哞哞」は、釈迦如来が五行山下に悟空を封じ込めた封印の呪文に他ならない。六行目の「火焔山」こそ、熱くて容易には越すに越されぬ西域の難所で、旅を進めるには「芭蕉扇」で煽いで火焔を消さねばならない。その扇を所持するのは牛魔王の妻の羅刹女に他ならず、玉面公主のもとに入り浸る亭主の牛魔王を交えて、悟空は芭蕉扇の貸借をめぐって烈しく戦う。その場面は、後述するように、「悟浄歎異」にもまず『絵本西遊記』に基づく記述を認めるところである。そして火焔山を越えた先の西天への途上にある「祭賽国」の城門をくぐった一行の目に飛び込んできたのは、枷や鎖をつけた僧たちが乞食する光景である。三年前に僧たちが住持する金光寺の宝塔が血の雨に汚されて以来、寺に嫌疑がかけられ、僧たちが苦行を強いられる現実を知って、乱石山碧波潭の万聖龍王とその公主と九頭駙馬を退治する一段に展開する。

「悟浄歎異」を具体的に探れば、「変化の法」をめぐって記す第二段に続いて、「悟空は確かに天才だ。」に始まる第三段では、「強敵と闘つてゐる時の彼を見よ！」と読者を喚起し、その悟空の姿を「何と、見事な、完全な姿であらう！」と絶賛し、悟浄は「逞しい緊張」、「律動的で、しかも一分の無駄も無い棒の使ひ方」、「圧倒的な力量感」、

「強靱な精神力の汪溢」をとらえ、「輝く太陽」「咲誇る向日葵」「鳴盛る蝉」と比べつつ、「もつと打込んだ・裸身の・壮んな・没我的な・灼熱した美しさだ。あのみつともない猿の闘つてゐる姿は。」と記している。その勇姿は、「一月程前、彼が翠雲山中で大いに牛魔大王と戦つた時の姿は、未だにはつきり眼底に残つてゐる。」と特筆される。「感嘆の余り、俺は其の時の戦闘経過を詳しく記録に取つて置いた位だ。」として示される「……牛魔王」以下の文は、『絵本西遊記』三編巻之三の「猪八戒助力敗魔王　孫行者三調芭蕉扇」に基づくものである。それを「続国民文庫」本『西遊記』によって引用すると同時に、中島が修正を加えた字句等を〔　〕内に、省略された字句を（　）内にそれぞれ示しておく。

（行者是を見て又鳳凰と変じて大鷹を抓まんとす。鳳凰は禽中の王たる者ゆゑ、）〔……〕牛魔王（再度変ずる能はず。頓て山の岸に飛下り）一疋〔匹〕の香獐と変じ（て、）悠然として草を喰ひ居〔ゐ〕たり。行者是〔悟空之〕を悟り虎に変じ（、）駈〔け〕り来りて香獐を喰〔は〕んとす。牛魔王（狼狽騒ぎ）急に大豹と化して虎を討〔撃〕たんと飛〔び〕かかる。行者是〔悟空之〕を見て（又）狻猊となり（、）大豹〔ナシ〕を目がけて〔掛〕駈来る〔襲ひかかれば〕。牛魔王（かなはじと思ひ忽ち）〔、さらばと〕黄獅に変じ（、勃誇〔たける〕声は）霹靂の如〔く〕にして〔嗟つ〕（、）狻猊を引裂（喰）〔か〕んとす。〔悟空〕此〔この〕時（行者）地上に倒轉〔転倒す〕ぶと見えしが、竟に一疋〔匹〕の大象となる。鼻は長蛇のごとく〔如〕牙は箏〔筍〕に似たり。牛魔王堪〔へ〕かねて（、吃々と噴出し、終に）本相を顕し〔、〕忽ち一疋〔匹〕の大白牛となり〔たり。〕、頭は高き峰の如く眼（の光）は雷〔電〕光の如く（、）両隻〔双〕の角は両座の鉄塔（の如く、牙は排利刃）に似たり。頭より尾にいたりて〔至る〕長き〔長さ〕事千餘丈、蹄より背上に至り〔る〕高き〔高さ〕事八百丈、〔で〕高声〔大声〕に呼〔ば〕はつて曰く、儞〔惡〕潑猴今我を怎麼〔如何〕とするや。行者〔悟空〕〔又〕（是を見て）同じく本相を顕し、大喝一声すると見えしが〔るまに〕、身の高さ一万丈〔、〕頭は泰山に似て眼は日月の如く、口は恰も血池に等く〔ひとしく〕、（牙は門の扉の如く、）〔奮然〕鉄棒を執〔揮つ〕て牛魔王を打〔つ〕。牛魔王角を以て是〔之〕を架〔受〕止〔め〕、両個〔人〕半山の裡〔中〕に在〔あつ〕て散々に戦ひければ、寔に山も崩れ海も湧返り、天地も是〔之〕が為〔ため〕に反覆するかと夥〔すさまじかり〕し。

悟浄のこの記録は、牛魔王との戦いにおける華麗な変身の手並みを記したものであるが、この話に前段があることは冒頭の「（行者是を見て又鳳凰と変じて大鷹を抓まんとす。鳳凰は禽中の王たる者ゆゑ）」、「（再度変ずる能はず。）」の省略された文字にも明らかである。かくて牛魔王が香獐に変じたのに対して、悟空は虎と変じ、大豹に変じれば狻猊に、黄獅に変じれば大象に、かくて牛魔王が大白牛の本相を顕せば悟空もそれに応じて大スペクタクルを現出する。これぞ「孫行者三調芭蕉扇」の見せ場で、この結果、牛魔王は捕らえられる。

悟浄は「何といふ壮観だつたらう！　俺はホツと溜息を吐〔つ〕いた。」と悟空に魅了され、「助太刀に出ようといふ気」も「孫行者の負ける心配」もなく、「一幅の完全な名画の上に更に拙い筆を加へるのを愧ぢる気持からである。」とは、悟空の絶対的な手並みを賛美する悟浄独

自の美学に他ならない。

この両者の戦いの前段に翻ってみれば、一日さんざんに戦った牛魔王は、八戒が加勢に入って戦い利あらず、積雷山魔雲洞に逃げ帰る。「積雷山魔雲洞」はメモの四行目にあった通り、「玉面公主」の本拠地である。玉面公主はこの物音に驚いて手下を繰り出すが、牛魔王は悟空・八戒に陰兵も加わって魔雲洞の入口を遮られて、やむなく羅刹女の翠雲山芭蕉洞へと逃げて行くに、悟空・八戒に追撃されて遁れがたく、変身の術を使う。

牛魔王又翠雲山へと逃行を、行者八戒寸間もなく追迫れば、牛魔王身を遁れがたく、忽ち一隻の天鶩となり、虚空を差て飛昇る。八戒土地神等是を知らず、専ら彼是と尋廻る。行者笑て曰く、儞們空中を飛者を見よ。八戒是を見て曰く、是一隻の天鶩也。行者曰く、彼天鶩則ち牛魔王が変ぜしなり。我追蒐（かけ）て捉べし。儞們洞の裡に入て小妖的を伐尽せ。八戒土地神是を聞て急ぎ洞中に伐て入る。行者は忽ち身を変じて一隻の海東青（こたか）となり、空中遥に飛昇り、雲眼より逆様（さかしま）に落し来り、天鶩を捉んと劈（ねらひ）ければ、牛魔王行者が変じたるを悟り、大鷹となりて飛来り海東青を捉んとす。行者是を見て又鳳凰と変じて大鷹を捉んとす。鳳凰は禽中の王たる者ゆゑ、牛魔王再度変ずる事能はず。頓て山の岸に飛下り一疋の香獐と変じて、（略）

牛魔王の変じた天鶩に対して、悟空は海東青に変じると、大鷹となる。かくて悟空が禽鳥の王たる鳳凰に変じては、これは敵わじと、「牛魔王再度変ずる事能はず。頓て山の岸に飛下り一疋の香獐と変じて、」のように地上の獣畜に矛先を変えて変身を試み、先に引用した香獐への変身に接続する。

先のメモの六行目「火焔山――祭賽国」の「祭賽国」は、前述の通り火焔山に続く途上の国である。それに先行する火焔山の芭蕉扇をめぐる話題にあって、三行目の「羅刹女、――翠雲山芭蕉洞」、四行目の「玉面公主、積雷山魔雲洞」は、この話題の舞台とそこに関わる登場人物名に他ならない。その話題は牛魔王と孫悟空との一連の変身比べの中で、「悟浄歎異」にはその後段部分の使用が確認できたが、そこには芭蕉扇もその持ち主の羅刹女（鉄扇公主）も、牛魔王の愛人の玉面公主も登場はしない。中島はこの火焔山の芭蕉扇をめぐる牛魔王と悟空の戦いの場面から、究極的に見応えある変身の術比べを析出顕彰したといえる。その叙述はあくまでも悟空の技量の創出に主眼があり、好敵手であった牛魔王との白熱した戦いに創作上の白羽の矢が立ったものである。一連のメモの文字は、中島の「悟浄歎異」における構想と叙述の方法を想起するに足る貴重な資料の意味をもつ。

＊＊＊

もちろんメモの一行目も「悟浄歎異」と大いに関わるものである。まず「七十二般、地煞変化法」は、すでに記したように須菩提祖師から伝授される。『絵本西遊記』では初編巻之一「霊根孕育源流出　心性修持大道生」・「悟徹菩提真妙理　断魔気本合元神」において、霊臺

方寸山斜月三星洞の須菩提祖師に入門を許された時、いまだ姓も名もないことから「儞が軀まさに猢猻によく似たり。我儞が身にしたがうて姓名を定むべし」とて姓を孫、名を悟空と賜って以来、道を学び聴くこと六七年。悟空はひたすら長生の道を学ばんことを一心に希う一方、衆に秀でた才知を知った祖師は戒尺を手にして罵って「頭を三下打ち、手を背に付て走て中門を関入玉（とざしいり）」う。こうして悟空の才覚を試しては(3)、子の刻に人目をしのんで訪れた悟空を近くに招いて長生の妙道の委細を直伝する。

念願の長生法に工夫をこらすことまた三年、祖師は向後五百年を経て起こる雷災、また五百年を経て起こる火災、さらに五百年を経て起こる風災という三災を免れる法を、悟空の耳元で伝授する。これこそ「七十二般の地煞変化の法」であり、悦び勇んで道法を練ることまた三年、悟空が終に「雲中を飛行せるの道」を得るや、祖師は一等抜きんでた「只一刻の間に十万八千里を飛行せる自在の法」である「觔斗雲」の秘方を伝授するにいたる。

ここに「七十二般地煞変化の法」と「觔斗雲」の秘方の伝授の由来が明らかになるが、それらの法術を練成した悟空は、変化の法を他の弟子たちに要められて披露してしまう。

一日門下の弟子等松樹の下にありて遊びしが、皆悟空にむかひて云ふ。前日師父儞に変化の法を教玉へりと聞（きけ）り。今試に身を変じて松の樹と化し、我輩に見せよかしと望みぬれば、悟空いとやすき事なりと身を揺（うごか）すと見えけるが、忽変じてひとつの松の大木と化（ばけ）たりけり。あまたの弟子等之を見て、手を打声を上化（あげけ）し得たるかな奇なり妙なりと称讃せる事かしがまし。

松の樹の下で他の弟子たちから松の樹に化して見せよと請われ、悟空が見事に松の大木に化せば、弟子たちの喝采の声を聞きつけ、その様子を目にした祖師。

祖師此声を聞て門外に出（いで）て是れを見（み）れば、悟空変身の法を行ひすまし、一大松樹と化したりける。祖師徒弟等を遠（とほ）く退（しり）ぞけ、悟空をまねきさとして曰（いは）く、儞衆弟子の中に於て変身して松樹と化したり。人皆儞が其術にくはしきを見て、必ず儞に求て習ひ得んと乞ふべし。儞若（もし）伝へずんば渠（きやつ）必ず害心をさしはさみ、儞が命も保ちがたからん。快（はや）く此所を去て性命を全くせよとの給へば、悟空是を聞て両眼より泪（なみだ）を流し、我師父にわかれまゐらせ（略）

悟空の松樹への変身を見届けた祖師は、徒弟を遠く退けて悟空を招くと、術を求める者たちが悟空に「害心」をもつことを懸念して、ここを早く出よと下命する。かくて両目に涙を流して辛い別離を強いられた悟空は本拠地の華果山水簾洞に戻るという仕儀。

さらに「如意金箍棒」もその直後のストーリーに登場する。華果山水簾洞に戻り、留守中に水簾洞の乗っ取りを謀った混世魔王を難なく退治した悟空は、傲来国で調達した武器で武芸教練して水簾洞の守備を固めるや、自身に相応しい武器を求めて東海龍王を訪ねる。来意を知った龍王が重さ三千六百斤の九股叉と七千二百斤の方天戟を置いて試せば、「我かゝる軽き武具は是をつかふに手にたらずいかにもおも

き武器を出して与へ候へ」とて、龍王は神珍鉄の如意棒を収めた海蔵に案内する。

悟空近よりて是を見れば、鉄棒の長さ二丈余りにして金色の光輝たり。両端に金の箍を入れ、如意意金箍棒重一万三千五百斤と、一行の文字を鐫つけたり。悟空まづ両手をもつて此棒をとり上、恨らくは此棒あまり長く余り太しと、其いふ言未だ終らざるに、不思議なるかな此鉄棒忽ち縮みよりて、悟空が心にかなひたる手ごろの棒と変じたり。

悟空と伸縮自在の「如意金箍棒」との不思議な出会いである。悟空は、「此神珍鉄の棒は、往昔夏の禹王水を治め給ひし時、海の深浅を定め給ひし定子なり。伸す時は上は三十三天に至り、下は十八層地獄に及ぶ。また縮まる時は僅に一二分計の綉花針（ぬひばり）となりて、耳の中に蔵し入る。真に奇妙の如意棒なり。」との由来を聞くと大満足で、藕絲歩雲の履一雙、鎖子黄金の甲一副、鳳翅紫金の冠一頂をもせしめて、龍王に別れを告げて意気揚々と水簾洞へ引き揚げる。平穏な一日、酔いに乗じて松の樹の下に睡れば、命数尽きて幽冥界に連行される夢をみると展開するのが、「如意金箍棒」の由来話である。

以上の「七十二般地煞変化の法」、「觔斗雲」、「如意金箍棒」に関わる一連の話を通覧してみると、松の樹の登場する話題が多いことに注目される。すなわち、悟空の松樹の下での松の大木への変化とその祖師の目撃、そして松の樹の下に睡った悟空の酔夢のように「松の樹」が重ねて出現する。その松の樹の度重なる残影の効果でもあろうか、思わず「悟浄歎異」冒頭の、師父三蔵法師が「道ばたの松の樹の下でしばらく憩うておられる」光景がまた想起される。その場面は中島の新たな創作になるもので、その松の木陰で「憩う」ばかりの師父の姿は、「三蔵法師は不思議な方である」に始まる第九段の「実に弱い。驚くほど弱い。」、「何と実務的には鈍物であることか！」といった師父の人物形象にも関わるものである。近くの原っぱでは悟空が八戒に龍への変身の術を厳しく指導するが、師父は弟子たちの声に反応する訳でもない。

まさに「悟浄歎異」の冒頭の一節は、上記のような『絵本西遊記』のストーリーにモチーフを得た中島オリジナルの一齣であったことが想起される。須菩提祖師の「七十二般地煞変化の法」、「觔斗雲」の伝授、「如意金箍棒」の獲得という一連の話題が、発想の源泉として大きくクローズアップされる。

悟空の熱のこもった八戒への指導は、一心不乱に松の大木に変身してみせた悟空の姿と根源的に同じである。悟空と八戒の姿は、中島敦文庫に蔵される中島が描いた「「西遊記」戯画」における悟空と八戒の戯れるがごとき画像にも連なるものである。(4) その場に姿のない悟浄こそ、「悟浄歎異」の冒頭に目撃者として出現する「沙門悟浄」の存在であるとさえ思われる。「沙門」の二字の解釈と相俟って、「悟浄歎異」冒頭の話は、典拠となる『西遊記』に由来した新たな話の創造の試みの中に位置づけ得るものである。もちろん『西遊記』とは、『絵本西遊記』のテキスト――中島の場合、自身の蔵書中の「続国民文庫」

本『西遊記』（『水滸伝　三　附西遊記』）のテキストに依ることは疑い得ない。

＊＊＊＊

加えて、「但し、彼にも決して忘れることの出来ぬ怖ろしい体験がたつた一つあつた。」に始まる第八段には、「或る時彼は其の時の怖ろしさを俺に向てしみ〴〵と語つたことがある。それは、彼が始めて釈迦如来に知遇し奉つた時ことだ。」という。華果山に戻った悟空は、「藕絲歩雲の履を穿き鎖子黄金の甲を着け、東海龍王から奪つた一万三千五百斤の如意金箍棒を揮つて闘ふ所、天上にも天下にも之に敵する者が無いのでる。」という中で、「列仙の集まる蟠桃会を擾がし、其の罰として閉ぢ込められた八卦炉をも打破つて飛出すや、天上界も狭しとばかり荒れ狂うた。群がる天兵を打倒し薙ぎ倒し、三十六員の雷将を率ゐた討手の大将祐聖真君を相手に、霊宵殿の前に戦ふこと半日余り。」と展開する。ここに悟空の前に立ち塞がって闘いを止めさせたのが、迦葉・阿難の二尊者を連れた釈迦牟尼如来に他ならない。

これまでの部分はもとより、以下に引用する五行山の話題には、メモ五行目の呪文に関する内容も含まれる。それは『絵本西遊記』では初編巻之三に基づくことが明らかである。いま「悟浄歎異」第八段の当該部分、ならびに『絵本西遊記』のテキストを「続国民文庫」本から引用し、中島の創作のありようを確かめる。場面ならびに如来と悟空の遣り取りの叙述を①～⑲に分段し、対応部分に傍線を付して示してみる。

まず「悟浄歎異」である。

悟空が①佛然として喰つて掛かる。②如来が笑ひながら言ふ。「大層威張つてゐるやうだが、一体、お前は如何なる道を修し得たといふのか？」③悟空曰く、「東勝神州傲来国華果山に石卵より生れたる此の俺の力を知らぬとは、さてさて愚かな奴。俺は既に不老長生の法を修し畢り、雲に乗り風に御し一瞬に十万八千里を行く者だ。」④如来の曰く、「大きなことを言ふものではない。十万八千里はおろか、我が掌に上つて、さて、其の外へ飛出すことすら出来まいに。」⑤「何を！」と腹を立てた悟空は、いきなり如来の掌の上に跳り上つた。⑥「俺は通力によつて八十万里を飛行するのに、儞の掌の外に飛出せまいとは何事だ！」と言ひも終らず⑦觔斗雲に打乗つて忽ち二三十万里も来たかと思はれる頃、⑧赤く大いなる五本の柱を見た。渠は此の柱の許に立寄り、⑨真中の一本に、斉天大聖到此一遊と墨くろ〴〵と書きしるした。⑩さて再び雲に乗つて如来の掌に飛帰り、得々として言つた。⑪「掌どころか、既に三十万里の遠くに飛行して、柱にしるしを留めてきたぞ！」⑫「愚かな山猿よ！」と如来は笑つた。⑬「汝通力が抑〻何事を成し得るといふのか？ 汝は先刻から我が掌の内を往返したに過ぎぬではないか。⑭嘘と思はば、此の指を見るがよい。」⑮悟空が異しんで、よく〳〵見れば、如来の右手の中指に、未だ墨痕も新しく、斉天大聖到此一遊 と己の筆跡で書き

付けてある。⑯「これは？」と驚いて振仰ぐ如来の顔から、今迄の微笑が消えた。急に厳粛に変つた如来の目が悟空をキッと見据ゑたまゝ、忽ち天をも隠すかと思はれる程の大きさに拡がつて、悟空の上にのし掛かつて来た。悟空は総身の血が凍るやうな怖しさを覚え、⑰慌てて掌の外へ跳び出さうとした途端に、如来が手を翻して彼を取抑へ、⑱その儘五指を化して五行山とし、悟空を其の山の下に押込め、唵嘛呢叭㗚哞の六字を金書して山頂に貼り給うた。世界が根柢から覆り、今迄の自分が自分でなくなつた様な昏迷に、悟空は尚暫く顫へてゐた。事実、世界は彼にとつて其の時以来一変したのである。⑲爾後、餓うる時は鉄丸を喰ひ、渇する時は銅汁を飲んで、岩窟の中に封じられた儘、贖罪の期の充ちるのを待たねばならなかつた。

続いて『絵本西遊記』初編巻之三の「八卦爐中逃大聖　五行山下定心猿」である。

……悟空も（略）①声を励し罵つて曰く、儞何所の者なれば爰に来つて我戦ひをさまたぐるや。②如来是を聞て笑ひ給ひ、我は西方極楽世界釈迦牟尼尊者南無阿弥陀佛なり。儞が天宮を閙すを静めんため此所に来つたり。抑儞は何なる道を歟修し得たるや。③悟空が曰く、我は天地生成の老猿華果山水簾洞の主なり。不老長生の法を学び、雲に乗風に御し、一瞬に十万八千里を往く。④如来の曰く、儞我掌の中にのぼりてよく此中を跳り出んや。悟空大きに笑ひ、如来いかなればかく獣子なるや、⑥我通力八十万余里を飛行す。然るをいはんや儞が掌の中においてをやと、云も終らず⑤如来の手の上に躍り上り、⑦白雲を起して是に打乗り、八九万里も飛行せしが、⑧その所に赤き大いなる柱の五根までならび立たり。悟空此柱の許に立て一根の毛を抜て筆と変じ、⑨正中の柱に斉天大聖到（こゝにいたりいちいう）レ此一遊すと書記し、⑩又雲を飛で如来の御手に立かへり、⑪我已に八九万の遠き国に至り、五根の柱に記号を留め回りたり。⑫如来其時大きに罵て曰く、儞野猿の徒⑬何事をか修し得たるや。先より我掌の内にのみ往来して、敢て躍り出る事あたはず。⑭儞が五根の柱と見しは我指なり。疑はしくば此指を見よとの給へば、⑮あやしみさしうつむきて是を見れば、如来の右の御手の中指に、斉天大聖到（こゝにいたりいちいう）レ此一遊すと我筆跡にて書付たり。⑯此に至て悟空大きにおどろき、⑰急ぎ掌（て）の中を飛下らんとせし時、如来忽手を翻して手中に提げ、西天門より出給ひ、⑱五指を化して五行山となし、悟空を山の下に押入れ、唵嘛呢叭㗚哞の六字を金書したる札を山の頂にはり付け給ひ、土地神祇におほせて悟空を守護せしめ、⑲饑時は鉄丸をあたへ、渇する時は銅汁を呑しめ、渠が災ひ充て人の救ひ出すを待しめ給ふ。

双方を対照すれば、「悟浄歎異」の五行山の封印の話は、展開上、⑤と⑥の文言が前後入れ替わっているのを除けば、基本的に『絵本西遊記』の展開に即しつつ、中島はその字句を自らの表現に作り替えていることが明白に看取される。その中にあって、封印の呪文は、まさにメモ五行目の記載にあるものに他ならない。その封印が解かれるの

は、『絵本西遊記』では初編巻之五「陥虎穴金星解厄　双岐嶺伯欽留僧」・「心猿帰正　六賊無踪」において、河州の双岐嶺で猟師の劉伯欽に救済され、両界山で別れる時のことである。この両界山こそ五行山に他ならず、山の麓で「我が師父来り給へ」としきりに呼ぶ声に驚く三蔵。石の匣の猿に問われて、大唐皇帝の勅により西天取経の僧であると伝えると、山の巓の金字の圧帖を除くよう請われ、いざ除かんとすれば、香風一陣、その「唵嘛呢叭咪哞」の帖を虚空に吹き上げ、やがて天地も崩れる大音響とともに、孫悟空が三蔵の馬前に拝礼する。かくて悟空が師徒となるが、「悟浄歎異」第八段のその部分には「五百年経つて、天竺への旅の途中に偶〻通り掛かつた三蔵法師が五行山山頂の呪符を剥がして悟空を解き放つて呉れた」とあるのみで、そこに呪文も大音響も描かれないことを確認したい。「悟浄歎異」では、「五行山の重みの下に五百年間押し付けられ、小さく凝集する必要があつたのである。だが、凝固して小さくなつた現在の悟空が、俺達から見ると、何と、段違ひに素晴らしく大きく見事であることか！」との意味づけが重要であったと考える。

＊＊＊＊＊

『絵本西遊記』に基づく記載は、第五段「悟空の身体の部分々々は――目も耳も口も脚も手も――みんな何時も嬉しくて堪らないらしい。」の中にも認められる。「太上老君の八卦炉中に焼殺されかかつた時」、「銀角大王の泰山圧頂の法に遭うて、泰山・須弥山・峨眉山の三山の下に圧し潰されさうになつた時」でさえ悲鳴を上げはしなかった悟空ではあるが、「最も苦しんだのは、小雷音寺の黄眉老佛のために不思議な金鐃の下に閉ぢ込められた時である。」に続く部分である。

①推せども突けども金鐃は破れず、身を大きく変化させて突破らうとしても、悟空の身が大きくなれば金鐃も伸びて大きくなり、身を縮めれば金鐃も亦縮まる始末で、どうにも仕様がない。身の毛を抜いて錐と変じ、之で穴を穿たうとしても、金鐃には傷一つ付かない。②その中に、ものを蕩かして水と化する此の器の力で、悟空の臀部の方がそろ〳〵柔くなり始めたが、それでも彼は唯妖怪に捕へられた師父の身の上ばかりを気遣つてゐたらしい。悟空には自分の運命に対する無限の自信があるのだ。（自分では其の自信を意識してゐないらしいが。）やがて、③天界から加勢に来た亢金龍が其の鉄の如き角を以て満身の力をこめ、外から金鐃を突通した。角は見事に内まで突通つたが、此の金鐃は恰も人の肉の如くに角に纏ひついて、少しの隙も無い。風の洩る程の隙間でもあれば、悟空は身をけし粒と化して脱れ出るのだが、それも出来ない。半ば臀部は溶けかかりながら、④苦心惨憺の末、つひに耳の中から金箍棒を取出して鋼鑽（きり）に変へ、金龍の角の上に孔を穿ち、身を芥子粒に変じて其の孔に潜み、金龍に角を引抜かせたのである。漸く助かつた彼は、柔くなつた己の尻のことも忘れ、直ぐさま師父の救ひ出しに掛かるのだ。（略）

当該部分は『絵本西遊記』三篇巻之五「妖邪假設小雷音寺　四衆皆

遭大厄難」にあたる。小雷音寺で悟空はニセ如来に如意棒を食らわそうとして金鐃の中に閉じ込められ、一行は難なく捕らわれる。「悟浄歎異」②にいう金鐃の溶解力は、妖王が手下にいった「我今行者を金鐃の裡に封じ籠置たり。三日三夜過なば管(かなら)ず化尽て水と成るべし。」を、いま悟空の身に迫る難として描き直したものであると考える。かくして、金鐃の中での悟空の難渋とその打開策に展開しては、①③④の字句との対応が確認される。

①行者は那金鐃の中に在て、右に推左に押ども些少も搖かす事能はず、身を如何にも長大になして突破んとすれば、偖も此金鐃妙不思議の宝貝にて、行者が身長大になる時は、金鐃も又長大なり、行者身を些小する時は金鐃もまた縮みければ、行者五六根の毛を扯抜変じて鉄錬と做て是彼二三百度突けれ共、些しの透間も見えざりけり。（中略）彼是と立騒ぐ中、早三更の頃になりぬ。行者は金鐃の裡に在て、今や光克(あかり)の見るかと、東を臨み西を顧み待けれども些少の透間も見えず。③星宿の列たる亢金龍が曰く、我今角の尖りを以て金鐃を突串べし。大聖裡に在て些少にても透間あるを見ば、疾く身を変じて潜り出よ。行者聞て心得たりと相待ところに、彼金龍鉄の如き角を以て、千斤の力を極め金鐃を突串せば、怪しや此金鐃恰も人の肉の如く、金龍が角に纏ひ些少も透間あらず、行者裡に在て金龍が角にて突串たるは知ると雖も、些の透間も見えざりければ、手を回て角の廻りを索り見るに、実に毛ほどの透もなし。行者呆掙果不事済々々々、風の漏べき隙も見えずと少時沈吟したりしが、風と一箇の手計を思当、④行者又謂て曰く、金龍儞些少の疼を堪よ、我今些少手計ありと、耳の裡より金箍棒を取出し、変じて一箇の鋼鑽と做、金龍が角の上に錐揉をなし孔を穿、身を芥粒ほどに変じて錐の穴に潜り入て、金龍快く角を抜べしと呼はりければ、金龍亦許多の力を極めて漸角を扯抜たり。行者角の中より跳り出で本相を顕し、鉄棒を推把て彼金鐃を打破れば、寔に是銅山も崩れ倒るゝ若き音勃然と響き渡り、微塵に砕けて飛散たり。

「悟浄歎異」第五段の末尾にいう「全く、此の男の事業は、壮大といふ感じはしても、決して悲壮な感じはしないのである。」に象徴される悟空の起死回生の知恵が『絵本西遊記』に由来して描き出されたことは確かである。

＊＊＊＊＊＊

第六段の冒頭に「猿は人真似をするというのに、これは又、何と人真似をしない猿だらう！」と記す。先の第七段において、如来の中指に「斉天大聖到此一遊」の八字を書いたのは決して猿真似ではなく、その自ら到来した事実を表明し、事実を伝達する意味をもつ。したがって達意の書字能力を有するのが悟空なのである。

第四段に「俺は、悟空の文盲なることを知つてゐる。曾て天上で弼馬温なる馬方の役に任ぜられながら、弼馬温の字も知らなければ、役目の内容も知らないでゐた程、無学なことを良く知つてゐる。」とあ

り、また「目に一丁字の無い此の猴の前にゐる時程、文字による教養の哀れさを感じさせられることはない。」とも書く。この「文盲」に関わる文字と先の「斉天大聖到此一遊」の書字能力とは、一見したところ矛盾するようにも考えられる。しかし、この「悟浄歎異」は副題にある通り「手記」として展開するものであり、各段それぞれの記事はある時々に書かれたものと理解することが可能でもある。この「文盲なること」を知ったのは、おそらくは弼馬温時代のことなどを悟浄が悟空から聞いた時の記録としての意味をもつ。当然、それを耳にしたのは、悟浄が流沙河で三蔵法師に弟子入りした後のことである。もう一方で、悟空がまた別の機会に「決して忘れることの出来ぬ怖ろしい体験」を話す中で明かされたのが、如来の中指に「斉天大聖到此一遊」の八字を書いた事実でもあったと解される。いわば、悟空のベールが一枚一枚剥がされるが如く、累加的に悟空の面目が明かされているものに違いない。その矛盾を孕むが如き筆法がまた「手記」としての妙味でもあると思われる。

「夜。俺は独り目覚めてゐる。」に始まる第十二段は、「今夜は宿が見付からず、山陰の渓谷の大樹の下に草を藉いて、四人がごろ寐をしてゐる。」中で、「悟空の嚊が山谷に谺するばかり」という。悟空の「嚊」は「人真似」とは異なるもので、その山谷に谺する音声は、宋の名高い道士の陳摶が「高臥」する鼾声をも想起させる。悟空の外連味のない大鼾声に対して、師父の「寝息」が対照的である。「起上つて、隣に寝てをられる師父の顔を覗き込」み、「暫く其の安らかな寝顔を見、静かな寝息を聞いてゐる」悟浄は、その中に、「俺は、心の奥に何かがポツと点火されたやうなほの温かさを感じて来た。」と結んでいる。夜空の「稍〻黄色味を帯びた暖かさうな星」に「三蔵法師の澄んだ寂しげな眼」を思い出し、師父の「愍れみの眼差」に思い至る悟浄であった。

第一段の昼餉の後の光景に対して、第十二段の旅寝の光景。第一段において、悟浄の目は悟空にフォーカスされて、時として三蔵法師や猪悟能八戒をも捉えて展開し、末尾の第十二段において独り目覚めた悟浄が四人ごろ寐する中で師父の人間味を闡明することが「沙門悟浄の手記」の結びとして象徴的である。

注（1）堀誠「中島敦「悟浄出世」札記」（中国詩文研究会「中国詩文論叢」第四十集、二〇二一年十二月）にすでに指摘している。

（2）濱川勝彦は『鑑賞　日本現代文学』第十七巻「梶井基次郎　中島敦」の「中島敦」「本文および作品鑑賞」「悟浄歎異」の中で、「先程言った「過去のわが南洋」のすぐ前に気にかかるメモがある。」と前置きして「二、三拾い上げてみると「羅刹女――翠雲山芭蕉洞」「唵嘛呢叭哞吽／火焔山――祭賽国」。とくに最後の「火焔山――祭賽国」は重要で、後に述べるように、この「――」から、「悟浄歎異」の世界が拡がってくるのである。牛魔王、羅刹女の一件が終り、火焔山を越えて祭賽国へ行くまでの時空に中島敦の「悟浄歎異」がある。また「唵嘛呢叭哞吽」なる梵語を音写した呪文は、「悟浄歎異」で釈迦如来が悟空を五行山に押し込めたとき（略）山頂に貼ったものである。」と指摘し、「「悟浄歎異」の完成時期は、もしかすると南洋行以降ではないか」との推定がなされている。さらに、渡邊ルリ「中島敦『悟浄歎異』と有朋堂版『絵本西遊記』」（「東大阪大学短期大学部教育研究紀要」第八号、二〇一一

年）にも、『悟浄歎異』の成立に関連して、「中島の南洋行（昭16・6～17・3）以後の諸作品のメモが多く記された「ノート第四」に、「羅刹女――翠雲山芭蕉洞」「唵嘛呢叭哞吽（ママ）／火焔山――祭賽国」という、『悟浄歎異』の内容に関わるメモが残されていることである。」と指摘され、「二　時空の設定」で濱川の所説を踏まえて考察を展開する。

（3）これが謎語に他ならず、悟空は難なく「頭をみたび打給ふは三更の時なり。手を背にして走て中門をとざし給ふは、我に後門より寝所に来れ。人に語らざる道を密に伝へ玉はんとの謎なり」と合点する。

（4）「「西遊記」戯画」に対する閻瑜『新しい中島敦像―その苦悩・遍歴・救済』（二〇一一年三月、桜美林大学北東アジア総合研究所刊1）「序章」における指摘を含めて、注（1）所掲の拙論に紹介した。

※「悟浄歎異」は『中島敦全集』1（二〇〇一年十月、筑摩書房刊）、「ノート第四」は同3（二〇〇二年二月、同刊）に依る。